
デジモンGATEstory 2nd

鷲原シュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンGATEstory 2nd

【Nコード】

N8981S

【作者名】

鷲原シュン

【あらすじ】

あの冒険から三年

再びデジタルワールドに危機が訪れ

拓馬たちは新たな仲間とともに立ち上がるのだった

ドルモン：新たなる戦い（前書き）

というわけでデジモンゲートストーリーセカンド

果たして今度はどんな冒険が拓馬たちを待っているのでしょうか
前作を読んでない方は先にそちらを読むことをお勧めします

ドルモン：新たなる戦い

デジモン達が逃げ惑う中オファニモンが飛び立つ
そしてそんな彼女に赤い光線が放たれた

「っふ」

禍々しい悪魔のようなデジモンがそこにいた

ベリアルヴァンデモン

左右の肩に「ソドム」と「ゴモラ」という生体砲を寄生させている
魔王型デジモン

必殺技はバンデモニウムフレイム

「やれ、ベリアルヴァンデモン」

その肩にフードを被った人物が乗っていた

「オーケーだ」

そういつてベリアルヴァンデモンが構えるが

「エデنزジャベリン」

先にオファニモンが攻撃を仕掛けた
が

「ソウルシールド」

ベリアルヴァンデモンのバリアで無効化されてしまった

「そんな！」

「やれ、ベリアルヴァンデモン」

フードの正面がはためき見えた顔は……………人間だった

「バンデモニウムフレイム！」

「うわああああああ！」

「はっ！」

突然舞が飛び起きた

あれから三年

拓馬たちは高校生となり、野球に精を出していた

「ふああゝ」

舞が大きなあくびをすると

「打ったぞ！」

「ファール球だ！」

「あ！危ない！」

飛んできたファールボールが彼女に当たった

「いたたた」

「どうしたの舞？ボーっとしちゃって」

隣に座ってた真琴が心配する

「あ、実は夕べ」

「え？デジタルワールドの夢を見た？」

卓が振り返りざまき返す

「うん、それでオフアニモンが」

「考えすぎだよ、オフアニモンは強い、舞が一番わかってるじゃないか」

兄の拓馬に励まされ少しは元気が出た様子の舞

「そうだね、まさかデジタルワールドがピンチだとかそういうことになったり」

「それが、そうも言ってられないぞ、拓馬」

急に背中に重みを感じた拓馬がふらつく

「「「え？」「」」

その背中に張り付いていたのはなんと

「「「「ど！ドルモン！」「」」」

かつての拓馬のパートナー、ドルモンだった

「おおお前なんでこっちに？」

「舞が見たのは夢なんかじゃないってことだ」

「と、とりあえず俺の家に」

拓馬の部屋

「どういうことなんだドルモン」

「人間が、デジタルワールドに攻めてきた」

「そんな！」

ドルモンの言葉に驚く拓馬達

「すでにセラフィモン達は敵の手に」

ドルモンの一言で沈んだ表情になる舞達

「そこでまた、お前たちの力を借りたいのだが」

「当然だろ！」

「お願いドルモン！私たちをもう一度デジタルワールドに！」

「よし、そういうことなら！」

そういつてドルモンは首から下げてた結晶をかざす

次の瞬間には拓馬たちは光に包まれその場からいなくなっていた

ドルモン：新たな戦い（後書き）

というわけでデジモンGATE story 2nd 始まりました
デジタルワールドで始まる新たな冒険にこうご期待ください
それにしても、最近暑いですね

主の部屋は窓の方角の関係上日が当たりやすくて
すぐ熱がこもっちゃうんですよ

おかげで風呂はいつでも汗かくことがしばしば
さて、次回はいよいよデジタルワールドへ

新たな戦いが幕を開けます

ガードロモン：新たなる大地（前書き）

というわけで前回再びデジタルワールドに旅立った拓馬達
果たしてどんなデジモンとの出会いが、そして戦いが待ち受けてい
るのでしょうか

ガードロモン：新たなる大地

草原に四人の人間がと一体のデジモンが刺さっていた

「あほか！なんでもつとうまいこと着地できないんだよ」

「（ズボンでよかった）」

「（よかった、ウェアの下にスパッツはいてて）」

拓馬がドルモンに折檻している横で安心する舞と真琴であった

「そんなことより、大変なことに気がついたんだが」

卓が蒼い顔をしていた

「僕たちは今D・ウォッチを持っていない、一応時計はしているが変化した様子はない、おまけに今いるのはドルモンだけ」

「大丈夫だよ、ドルモンは力が戻ってるはず……あれ？そういえば何でドルモンのままなんだ？」

「それが、人間界行くのに力ほとんど使っちゃまって、D・ウォッチがあればドルガモンまでならなんとか進化できそうだけど」

「……………」

でつかいたんこぶから煙を出しながらドルモンがうずくまっていた

「ったくこいつは」

「どうする？」

四人で相談していると

「やべ、そういえばとうさんになにも……………あれ？」

「どうした拓馬？」

「時計じゃない、携帯が変化している」

拓馬の一言で全員がポケットの中の携帯を取り出す

どうやら全員携帯の形が変化しているようだ

「おいドルモン、これなんだかわかるか？」

拓馬の問いに振り返るドルモン

「ドルモンお願い、知ってたら教えてくれない？これのこと」

「いや、みたことはあるけど詳しくは知らない」

「見たことは………って！どこで見たんだ！？」

「敵の人間がそれ使ってデジモンを使役してた」

「え！うそ」

思わずその機会を見つめる拓馬だったが次の瞬間

彼らのいたところで爆発が起きた

「知らないなら教えてやる！そいつはD・フォンつつてな、我が總統の作りだしたもんだ」

そういつて彼らの前に大柄な男性と小さな少女が現れた

二人とも黒いD・フォンと呼ばれた携帯電話を持っていて、同じようなデザインの服を着ている

「あいつらは？」

「デジモンを使役していた連中だ、そうか、あれはD・フォンっていうのか」

「とにかく、こいつを使えば進化できるかも」

そういつてD・フォンを掲げる拓馬

「ゲートオープン！」

が、うんともすんとも言わない

「どうやらD・ウォッチとは使い方が違うみたいね」

「おーい、こいつにそんな機能はねーぞ」

「え！マジ！」

男性に突っ込まれショックを受ける拓馬だったが

「待って、もしかしたら機能が違うかも」

「そうだな、僕達のはドルモンが光らせたあの結晶で変化したと考えるべきだ」

「ああ、あれはイグドラシルから」

などと拓馬達が話し込むので

「ったく、わけのわかんねえことを！やれ！ガードロモン！」

ロボットのようなデジモンが攻撃の構えに入る

ガードロモン

コンピュータのネットワークを守るデジモン

必殺技はディストラクショングレネード

「ゲ！逃げるぞ」

「逃がさない……………」

そういつて女の子の方もD・フォンを構えた

「ダルクモン、リアライズ」

そういつて彼女がD・フォンから取り出したデジモンはなんと

「バテール・デ・アムール」

金の鎧を着た女性天使が拓馬たちを攻撃してきた

「まさか……………ダルクモン！」

そう、かつての友、ダルクモンだった

ガードロモン：新たなる大地（後書き）

というわけで前作のキャラがさっそく再登場です

こっぴうのちよくちよくあると思うんでお楽しみに

ガードロモンは初登場ですね

というわけで今回はガードロモンについて語ってみたいと思います
アニメでの初登場は無印、ムゲンドラモンの部下でした

02ではイービルリングに操られた個体が登場、リング外した後更に修理するという二度手間を披露（笑）

話そのものはいい話だったんですがね、あの話結構好きです

ティマーズではなんとパートナーデジモンの一体でした

が、最後までガードロモンだったことを公式で突っ込まれました（笑）

フロンティアは………でできたっけこいつ？（おいおい）

クロスウォーズではダストゾーンで雑兵として登場でした

ちなみに作者の近況はっていうと

金曜日に買い物に行った時、仕事帰りでスーツ着てたため

ビールを店員に「いかがですか」と言われました（18歳です）

今後はその話に出てきたデジモン………ていうかタイトルのデジモンを特集した後

作者の近況こっぴうて語るのが定番になります

ドルガモン：新たな敵（前書き）

前回、敵の手に落ちたダルクモンが彼らの前に立ちふさがったわけですが

果たしてこのピンチをどう切り抜けるのか

ドルガモン：新たな敵

「そんな……………ダルクモンだって!？」

ダルクモン

戦場の女神と呼ばれる下級天使型デジモン
必殺技はバテール・デ・アムール

「行きなさい、ダルクモン」

少女がつぶやくとダルクモンはこちらに向かってきた

「ドルモン！もしかしてダルクモンは」

「ああ、あいつらのD・フォンで操られてるんだ」

確かにダルクモンの目は真っ赤に光っていた

よく見るとガードロモンのほうも同じような目をしている

「その通りだ！操られてるとなれば迂闊に攻撃できまい」

とその時ガードロモンにドルモンの鉄球が当たった

成長期の攻撃だから全然効いてないが

「ってなんでガードロモンは攻撃できるんだよ!」

「たたけば治ると思って」

「一昔前のテレビじゃねーよ!」

「少し黙りなさいビリー」

彼らのやり取りを静観していた少女がつぶやく

どうやらこの男性はビリーという名前らしい

「でもよアイリス」

「ところで……………あなたたちはなぜデジタルワールドに」

「無視かよ!」

「それはこっちが聴きたいわよ！あなたたちなんの目的があつてこの世界に」

「……………聞いても無駄なようね」

「いやこっちの質問聞けよ！」

どうもこの少女、確かアイリスといったか
融通のきかないところがあるようだ

「とにかく進化する方法がわからないことには……………」

舞達とダルクモンから逃げながらつぶやく拓馬

「さてよ、確か前にマグナモンが……………」

「D・ウォッチは心で進化をもたらす」

「よし！ドルモン！ダルクモンの目を覚まさせるぞ！」

「？ああ」

そういつて拓馬がD・ウォッチを構える

「ダルクモンを……………助ける！」

D・フォンの画面に紋章が映りその紋章が輝いた

「ドルモン進化！」

ドルモンの体が一回り大きくなり、翼がはえた

「ドルガモン！」

「よし！出来た！」

ガッツポーズをする拓馬

一方のドルガモンはガードロモンに向かって飛んでいた

「馬鹿な！D・フォンにそんな機能あるはずが」

「……………」

動揺するビリーに対してアイリスは冷静だった

「パワーメタル！」

ドルモンが放った攻撃でガードロモンは吹っ飛ばされ木にたたきつけられて気絶した

「ん？おいら何してたんだ」

次の瞬間には目を覚ましていた、正氣に戻ったようだ

「なるほど、操られたデジモンは倒せば正氣に戻るのか」
卓がつぶやく

「よし！ドルグレモン！その調子でダルクモンも」

「ユニモンリアライズ」

なんとアイリスが天馬のようなデジモンを出現させた

ユニモン

ユニコーンの角とペガサスの羽を持ち合わせたデジモン
必殺技はホーリーショット

「ビリー、いったんひくわよ」

「くそっ！てめえら覚えてやがれ」

そういつて彼らはユニモンに乗って逃げていった

「パワーメタル！」

切りかかってきたダルクモンにカウンターで攻撃を決め、再度木にたたきつけた

「たたきつけてばっかり」

まあ真琴のいう通りなんだけど

「大丈夫？ダルクモン？」

「ええ、ところであなた達」

真琴が介抱しながらつぶやくダルクモン

「一人増えています？」

その言葉に舞はずっこける

「（そういえば……………」

「（ダルクモンは舞と面識がほとんどなかったな）」

「とにかく助かりました、また来てくれてありがとうございます」

「ダルクモン、教えてくれないか、この世界に今何が起きているか」

ドルガモン：新たな敵（後書き）

というわけでまずはドルモンが順当に進化で、ドルガモンなんです

アニメではゼボリューションという特別編にて

究極体、それもロイヤルナイツに立ち向かうというなんとまあ

作者のほうは最近暑くてダウン気味です

というのも作者の部屋は日当たりが良く冬でも割と熱がこもるんです
おかげで寝苦しいのなんの

アゲモン：新たな仲間（前書き）

前回見事ドルガモンに進化してダルクモン、ガードロモンを解放した拓馬達

しかし舞達はいまだにパートナー不在のまま
果たしてこの先どうなるのでしょうか

アグモン：新たな仲間

「あなた方が人間界に帰ったあと、しばらくは平和な日々が続きました」

今拓馬たちはダルクモンからこの世界の現状を聞いていた

「しかし、人間界から突如ある集団が攻め込んできて」

「かつての七大魔王デジモンと同様にデジタルワールドをてにいれようとしたということか」

ダルクモンの言葉に卓が付け加える

「ところで、どうしてあなたやガードロモンは……あれ？ガードロモンいなくなってる」

「ああ、あのガードロモンなら目を覚ましてすぐにどっか行ったよ」

「そ、そう」

人の苦勞も知らないで、そう思う舞だったが

よく考えると自分は何もしてないのでスルーすることにした

「話を戻して、あなたたちはどうやって操られていたの」

「そこまでは、彼らのデジモンとの戦闘に敗れ、意識を失った所までは覚えてるんですが」

「とにかくダルクモンには治療が必要だ、少しやりすぎてしまったようだし」

確かにダルクモンは傷だらけだ

拓馬たちはまず近くに村かなにかないか探すことになった

ダルクモンはけがをしているので舞と真琴が肩を貸していた

「それにしても、デジタルワールドもずいぶん変わってしまったのね」

舞が辺りを見回す、六年間この世界で暮らしていた彼女も、このあ

たりは見覚えがないようだ

「確か、この先に小さな村が」

一方こちらは敵のアジト

「珍しいじゃん、あんたが失敗して帰ってくるなんて」

アイリスの頬をコギヤルのような女性が突っついていた、やはりアイリスと似たデザインの服を着ている

「よせジャネット」

「っち、うるさいのがきた」

もう一人、やはり彼女たちと同じような服を着たの男性がやってきた髪型が整っており見るからに固い性格してそうだ

「んで？何の用だよアレックス」

「いえ、私もその人間達に興味がありましたね、ちょうどいい、ジヤネットも一緒に来てもらえるかな」

「ったくしゃーねーな」

そういつてジャネットも立ち上がる

「……………」

「それはそれは大変だったでしょう」

フローラモン

ヘルメット状の花びらで身を守っているデジモン

必殺技はアレルギーシャワー

「ここはフローラモンたちの村だったのか」

そういつて辺りを見回す拓馬達

そこいらじゅうフローラモンでいっぱいだ

「あら？」

ふと、舞が一匹だけ違うデジモンが居ることに気がついた

アゲモン

肉食恐竜のような姿をした爬虫類型デジモン
必殺技はベビーフレイム

「あのアゲモンは？」

舞の質問にフローラモンの表情が曇る

「それが、彼自身にもわからないんです」

「いたいた」

ジャネットが崖の上から彼らのいる村を眺めていた

「ではまいりましょうか」

アレックスが自分のD・フォンを構える

「あいよ！キウイモンリアライズ」

「スナイモンリアライズ」

「アゲモン」

舞がアゲモンのところにやってきた

「僕に何の用」

「フローラモンに聞いたわ、あなたは記憶がなく、自分が何者かわからないままこの村のフローラモン達に助けられた」

「……………それがどうかしたの」

「私も同じ、9年前この世界に流れた私は親の顔も知らぬまま孤独感に包まれ、唯一マグナモンとプロットモンが心の支えとなっていた」

が、プロットモンは敵の手に落ち、マグナモンにいたってはどこにいるのかすらわかっていない

それを思い舞が哀しげな表情になる

「……………ねえ、君名前は？」

「ん？舞、宮原舞」

そういつて舞が振り向いた途端背後で爆発が
「「え？」」

ちっちゃいダチヨウみたいなデジモンとかまきりみたいな不気味な
デジモンが暴れていた

キウイモン

頭に生えている草のような部分がエネルギー発生装置で栄養を作り
出す

必殺技はリトルペッカー

スナイモン

敵を追いつめ巨大な鎌でしとめる残忍な性格の昆虫型デジモン
必殺技はシャドウシックル

D・フォンの画面に紋章が映りその紋章が輝いた

「ドルモン進化！」

ドルモンの体が一回り大きくなり、翼がはえた

「ドルガモン！」

ドルガモンがスナイモンとキウイモンに向かっていくが

「リトルペッカー」

「シャドウシックル」

地上と空中から狙い撃ちされ対応できない

「兄さん！」

舞が駆け付けるもパートナーデジモンのいない彼女は何もできない

「私に……力があれば」

その時、彼女のD・フォンが輝いた

グレイモン：新たなパートナー（前書き）

何と前回

パートナーデジモンのいない舞のD・フォンが輝きました
果たしてこの輝きは

グレイモン：新たなパートナー

「これは」

戸惑いながらもD・フォンを取り出す舞

「プロットモンが居ないのに……………」

「舞！僕の体が」

よく見るとアグモンの体も光っていた

「……………もしかして」

舞がD・フォンをかざすとD・フォンの画面が輝いた

D・フォンの画面に紋章が映りその紋章が輝いた

「アグモン進化」

アグモンの体が大きくなりオレンジ色の体に茶色い甲殻を持つ竜へと姿を変えた

「グレイモン」

グレイモン

頭の皮膚が硬い殻のようになった恐竜型デジモン
必殺技はメガフレーム

「シャドウシックル」

スナイモンの鎌から放たれた衝撃波がドルガモンに向かうが

「メガフレーム」

グレイモンの口から放たれた炎が衝撃波を打ち消した

「兄さん！地上のキウイモンは私達が引き受ける！兄さんはスナイモンを」

「舞……………わかった！ドルガモン」

「くっそ、まだ仲間が居たのかよ」

「どうやら、一筋縄ではいかぬようすな」

崖の上から様子をうかがっていたジャネットとアレックスだったがふと、背後に気配を感じた

「おや、来ていたんですかアイリス殿」

「……………」

アレックスの問いかけにも答えずアイリスはただ黙ってドルガモン達を見つめるだけだった

スナイモンとドルガモンが空中で取っ組み合いをしていた

「接近戦は鎌を持つてる向こうが有利だ」

卓が外野から叫ぶ

「となると遠距離だな！パワーメタルで距離を取れ！」

「いわれなくてもわかってる」

鉄球をスナイモンに向けてはなつドルガモンだったが

「シャドウシックル」

スナイモンの衝撃波で鉄球を両断されてしまった

「ゲー！」

「パワーメタルが効かない」

「メガフレイム」

先ほどから炎で攻撃するグレイモンだが的が小さいうえすばしこいので狙いがつけられない

「リトルペッカー」

キウイモンの放った爆弾でひるむグレイモン

「兄さん、どうも相性が悪いみたい」

「だとしたらここは」

そういつて舞と拓馬が背中合わせに構えると

お互いが立ち位置を変えた

「ドルガモン！おれたちの相手はキウイモンだ」

「スナイモンと戦うわよ、グレイモン！」

「シャドウシックル」

「メガフレイム」

スナイモンの放った衝撃波が炎に飲み込まれた

「今よ！」

「ホーンインパルス！」

炎の中からグレイモンが現れスナイモンに強烈な体当たりを喰らわせた

「リトルペッカー」

キウイモンの爆弾をドルガモンがかわし続けキウイモン本体を抑えつけた

最初はじたばたあばれていたがドルガモンがあいてるほうの手をギリリと光らせると冷や汗かいたまま大人しくなった

キウイモンの顔の片方にでつかいたんこぶが出来て気絶している

一方のスナイモンも崖に寄り掛かって気絶していた

「やるじゃないか」

「誰だ！？」

スナイモンの寄り掛かっている崖の上にジャネットとアレックス

「私はアレックス、こっちはジャネットと申します、アイリス殿に勝利したあなた方に興味がありましたね」

「おい、なんであたしは呼び捨てなんだ」

「今回は破れてしまいました、次はそうはいきません」

「おい！聞いてんのか堅物！おい！」

「ではまた」

「無視すんじゃないぞこら！」

そういつて彼らは去って行った

「なんだっ たんだあいつら」

「それにしても、どうしてアグモンが進化できたのかしら」

舞のD・フォンを眺めながら真琴がつぶやく

「もしかしたら、パタモン達以外にも、僕達と適合した心を持つデジモンが居るのかも」

「じゃあ、私たちも新しいパートナーを見つければ、拓馬たちと一緒に戦える」

可能性を見出してはしゃぐ卓達

「アグモン、そういうわけだから、私たちと一緒に来てくれる？」

「え？でも……」

そういつてフローラモン達を見るアグモンだったが

「お行きなさい、あなたを必要としてくれる方が居る、ならばその方達の為に、私たちは大丈夫です」

フローラモンの後押しもあり拓馬たちに同行することとなった

「ねえ、おろしてよ舞」

「だーめ」

舞に抱かれたまま困った様子のアグモン

「舞、習慣になっちゃってるんだな」

「ずっとプロットモン抱いてたものね」

「というか、重くないのだろうか」

後ろの三人はすっかり呆れ果てていた

グレイモン：新たなパートナー（後書き）

というわけで作者の近況ですが

最近クロスウォーズ見れてない

しかも執筆もなにやら遅れ気味です

さて、今回は前回パソコンの修理で書けなかった分も特集しますよ
アグモンは初代とセイバーズで主役として活躍

セイバーズに至っては成長期のままラスボス撃破しました

あといろんな亜種いますよね

ユキアグモンとかトイアグモンとか

グレイモンは主に初代で活躍

セイバーズではジオグレイモンになっちゃってたからなあ（え？グ
レイモンじゃないの？が初視聴のときの本音）

あとクロスウォーズにも少しデザインの違いグレイモンが登場

ちなみにこの小説のアグモンは初代仕様、グレイモンも初代の奴で
す

ドリモゲモン：地底の戦い（前書き）

というわけで

前回アグモンという新たな仲間を加えた拓馬達

果たして今回はどんな冒険になるのか

そしていまだ見つからぬ真琴と卓のパートナーデジモンとは

ドリモゲモン：地底の戦い

アグモンを旅の仲間に加えた拓馬達

今はのどかなところで休憩中

「食べ物の種類とかが前と変わってなくて助かったわ」

「こっちの世界長い舞が居てくれるおかげで木の実とか簡単に手に入って助かるよ」

リングっぽい木の実をかじりながら拓馬がつぶやく

卓がD・フォンとにらめっこしている

「何をしているの？」

「ん？ああ、D・フォンの機能を探るところさ、D・ウォッチと違うところがあるかもしれないからね」

そういつてD・フォンを操作する卓

「で、なんかわかったか」

「ああ、大体の構造は携帯電話と一緒に、電話もかけられるらしい、ご丁寧に設定とかは元の僕らの携帯と変わってない」

「そういえば待ち受け画面がそのままだったわ」

「そうなの？」

「舞は待ち受けいじらないもんな、着メロも基本のままだし」
などと談笑していた

「フフ、笑ってられるのも今のうちですよ」

人の良さそうな青年が崖の上から彼らを眺めていた、やはり同じようなデザインの服だ

「……………」

隣にはまたアイリスの姿も

「まあ見てください、ドリモゲモンリアライズ」

そっいつて青年はモグラのようなデジモンを4体も出現させる

ドリモゲモン

鼻先に巨大なドリルがついたモグラのような獣型デジモン
必殺技はドリルスピンの

「どうする気……レイン」

「まあ見ててください、ドリモゲモン」

青年……レインの指示でドリモゲモンが地面に潜った

「つまり、地図はここところに」

と、卓がみんなにD・フォンの説明をしていると背後からドリモゲモン達が現れた

「きゃ！」

「うわ！」

そしてドリモゲモンは無理やり拓馬たちをそれぞれが出てきた穴に引きずり込んでしまった

「あれでどうするつもり」

「このあたりに入りくんだ地底洞窟がありましてね、そこでしたらドリモゲモンに有利かと思ひまして」

レインの回答に少し考え込む

「心配ご無用です……アイリスさま」

「もう、どこなのこは」

とりあえずD・フォンを取り出して地図を開く真琴

「えっと、あれ？さっき私を引きずる込んだデジモンの反応がない

……！」

よく見ると彼女の背後にデジモンの反応が

「だれ！」

彼女がそう叫ぶと岩陰から小さいいたちみたいなデジモンが姿を現

した

クダモン

透明の体を持つ神聖なる聖獣型デジモン

必殺技は絶光衝ぜっこうしょう

「怪しいものではない、私はこの洞窟にすんでいて

「か」

「か？」

「かわいいいいい！」

クダモンを抱く真琴

「可愛い、ロップモンも可愛かったけどこの子も可愛い」

「く、苦しい」

こんなんで大丈夫なんだろうか

一方他のみんなはというと

「この狭いところじゃグレイモンに進化できない」

というわけでさっきからドリモゲモンから逃げ続けている舞とアゲモン

「くっそ、狭くて戦いにくい」

別に進化できないわけではなかったのだが通路が狭くギリギリまでかがんでドルガモンの背中に乗って地上に出ようとしている拓馬

そして卓はというと

「ここを登れば地上か」

ご自慢の頭脳で引き込まれた穴の真下まで来たはいいのですが

「さて、どうやって登るか、無難にフリークライミング、つてのもありだけどこの高さじゃなあ」

それに卓はフリークライミングの経験がない

万が一さっきのドリモゲモンが戻ってきたら危険だ
「おい、そこで何やってるんだ」
すると青いデジモンが上から穴をのぞいていた

ブイドラモン：集う仲間達（前書き）

はてさて、レインの操るドリモゲモンに地底の洞くつに引きづり込まれた拓馬達

果たして無事脱出することが出来るのでしょうか

そしてドリモゲモンに勝利することが出来るのでしょうか

ブイドラモン：集う仲間達

脱出の方法を穴の下で考えていた卓の前に青いデジモンが現れた

「おーい、君もデジモンなんだよな」

「うん、俺ブイモン」

ブイモン

悪戯好きでやんちゃな成長期デジモン

必殺技はブイモンヘッド

「ちょうどいいや、ここから出してほしいんだ」

と、ブイモンに話しかけたところで後ろから気配を感じた

彼を引きずりこんだドリモゲモンが戻ってきたのだ

「くっ」

一方真琴も走りながらクダモンと共にドリモゲモンから逃げていた

「（逃げてばかりじゃ駄目、こんなことしているうちにロップモン

は……………私に戦う力があれば！）」

そう考えているとポケットに入れていたD・フォンが輝いた

「な、なんだこれは」

そしてクダモンの体も

「もしかして……………お願いクダモン！力を貸して！」

「ブイモンヘッド！」

ブイモンの頭突きがドリモゲモンに炸裂した

が、一瞬ひるんだだけで骨を持って反撃しようとしてきた

「ブイモンー！」

その時だった、卓のD・フォンもまた輝いた

D・フォンの画面に紋章が映りその紋章が輝いた

「ブイモン進化」

ブイモンの体が大きくなり立派な角がはえた

「ブイドラモン」

「ブイドラモン………君が僕の新たなパートナーだったのか」

ブイドラモン

デジモンのなかでも最強クラスの攻撃力を持つ幻竜型デジモン
必殺技はブイブレスアロー

「ここはすいぶん広いのね」

通路の一つから舞が駆け込んできた、アグモンも一緒だ
背後からドリモゲモンが襲いかかろうとするが

「ここなら全力で戦える」

そう呟いた舞のD・フォンが光を放つ

D・フォンの画面に紋章が映りその紋章が輝いた

「アグモン進化」

アグモンの体が大きくなりオレンジ色の体に茶色い甲殻を持つ竜へ
と姿を変えた

「グレイモン」

グレイモンが体当たりしてドリモゲモンを吹っ飛ばす、すると別の
通路から別のドリモゲモンが飛んできた

が、そのドリモゲモンは別の何かに向かって威嚇している様子
しばらくするとものすごい速さで何かが飛んできた

レツパモン

意思を持つ刃状の尻尾を持つ聖獣型デジモン

必殺技は駆駆裂空斬くろくろれつくうざん

「見つけた！私のパートナー見つけたわよ」

「若槻先輩も見つけたんですね、よかった」

「あ、もしかしてその青いデジモン……」

「ええ、僕も見つけましたよ」

そんなこと言っていると残った通路からドルガモンが飛んできた

「お、もうみんな揃ってるじゃん」

「拓馬が一番最後だよ」

なんてやってるうちにデジモン達がドリモゲモンを取り囲んだ

「よし！一斉攻撃だ」

「パワーメタル！」

「メガフレイルム！」

「真空カマイタチ！」

「ブイブレスアロー」

拓馬の言葉を皮切りにそれぞれのデジモンが必殺技でドリモゲモンを蹴散らした

四匹とも壁にたたきつけられ気絶している

「おやおや、やられてしまいましたか」

崖の上から残念そうに見るレイン

「ユニモンリアライズ」

その一方でアイリスはD・フォンからユニモンを取りだした

「おや、もう帰られるんですね……アイリスさま」

「そういうことだったか」

拓馬達から話を聞いてか納得するクダモン

「だったら俺は喜んで卓に協力するよ」

「私も協力する、これからよろしくな、真琴」

新たにクダモン、ブイモンという頼もしい仲間を加えた拓馬達

アイリスが机にもたれかかって寝ていた

「お疲れのようですね」

そんなアイリスに優しく毛布をかけるレイン

「俺にはわかんないね」

「ビリー」

そんな彼の後ろに頭の後ろで腕を組みながらビリーが立っていた

「なんでお前がそんなガキに入れ込むのか」

「これが……長い間つかえていた私の役目ですから」

そっぴいながらアイリスの寝顔を見て笑みをこぼすレインだった

デルタモン：総力戦（前書き）

というわけで前回ついにパートナーデジモンが全員揃いました
果たして今回はどのような戦いが待っているのでしょうか

デルタモン：総力戦

「オイオイオイ、レインも負けちまったのか」

アイリス達が5人そろっている中

ジャネットがレインにくっついてかった

「よせジャネット」

アレックスがなだめるもその顔は少し悔しそうだ

「もう少しすればあの方から新たな戦力が届く、それまでの辛抱だ」
レインがそう伝えるが

「でもよお、あの四人……待てよ」

拳をぶつけて悔しがってたジャネットだったが

「よく考えたら、うちらいつも二人がかりだったよな」

「ええ、原則二人行動ですから」

「だったら全員でかかったらどうなんだ、うちら5人だから一人多いし」

ジャネットのアイディアに全員が見あった

「……………」

ただ一人、アイリスを除いて

拓馬たちは森の中で休憩を取っていた

卓は一人、D・フォンで仲間のデジモンのデータを見直していた

「ドルガモン、グレイモン、レッパモン、そしてブイドラモン」

D・フォンのデジモン図鑑でパートナーデジモンの成熟期を調べる卓

「これが今の僕達の全力……………」

そう呟いてくるとどこからか攻撃が飛んできた

「今の攻撃は!？」

「あそこだ」

なんと崖の上にアイリス達5人がいた

「オイオイ今まで戦った相手勢ぞろいかよ」

更に彼らはいかにも強そうなデジモンを連れていた
ビリーのそばには飛竜フイバーンのごとき機械デジモンが

ラプタードラモン

ターゲット

獲物を確実に仕留める為に捕食本能を持つ野生のデジモンをベース
に改造されたサイボーグ型デジモン

必殺技はクラッシュチャージ

ジャネットはスリムな緑色の昆虫デジモンを

ステインゲモン

人型の形態を持つ非常に珍しい昆虫型デジモン
必殺技はスパイキングフィニッシュ

アレックスは落ち武者のようなデジモン

ムシャモン

幾多の戦いの中を生き延びた武者のような姿をしているデジモン
必殺技は切り捨て御免

レインは三つ首の恐竜型デジモンを

デルタモン

3体のデジモンがコンピュータのバグで合わさったことにより誕生
した合成型デジモン

必殺技はトリプレックスフォース

そしてアイリスは妖狐のようなデジモンを連れていた

キュウビモン

九本の尻尾を持つ妖獣型デジモン
必殺技は狐炎龍

「鋼のビリー」

「森のジャネット」

「刃のアレックス」

「龍のレイン、それと光のアイリス様」

「我々は……」「ストップストップストップ！」なんですかいきなり」

自己紹介をし始めた彼らだったが拓馬がさえぎった

「突っ込みどころ多すぎ！自己紹介長すぎ！属性何のつながりもないしその！刃ってなんだ刃って！ねーよそんな属性！大体お前この前昆虫型だったろ！っつーか森ってなんだ！草でも昆虫でも何でもいいのかお前は！っーかなんでレインに名乗らせてんだ！自分で名乗れ！」

「兄さんも突っ込み長い」

「……………」

舞の指摘で黙り込んでしまう拓馬

「メガフレイム！」

グレイモンが口から炎を出して攻撃するが

「トリプレックスフォース」

デルタモンの攻撃に打ち負けてしまいスティングモンの反撃を喰らった

「レッパモン！スティングモンを押さえて」

「くるくるわっくくわん
駆駆裂空斬」

レッパモンが回転して突っ込むが

「スパイキングフィニッシュ」

スティングモンの攻撃で動きを止められてしまう

「今だ！やれラプタードラモン」

「クラッシュ……………！！」

ひるんだレッパモンを攻撃しようとしたところで上からドルガモンに攻撃され撃墜してしまう、ラプタードラモンは脱落だ

一方ブイドラモンはムシャモンを相手にしていた

「切り捨て御免」

「ブイドラモン！左だ」

卓の指示で正確によけるブイドラモン

「次は右」

卓の指示を受けブイドラモンに攻撃は当たらず、ムシャモンはばて始めた

「今だ！突っ込め！」

「ハンマーパンチ！」

両こぶしを思いっきり脳天に叩きつけた攻撃が見事ヒット！ムシャモンもリタイアだ

「ホーンインパルス」

グレイモンに抑えつけられデルタモンの動きが止まった

「させるなステイングモン！」

「スパイキング……………！！」

グレイモンを攻撃しようとしたステイングモンだったが背後からレッパモンに攻撃されリタイア

残るはデルタモンと……………

「狐炎龍」

キュウビモンがグレイモンを攻撃したのでデルタモンに逃げられてしまう

「申し訳ありませんアイリスさま」

「構わないわ、それより戦闘に集中して」

果たして残った一人の実力は

デルタモン：総力戦（後書き）

最近ツアー行ったり祖父が死んだりで忙しくて後書きかけなかった
（汗）

で、今回タイトルとなったデルタモン

アニメでは02でバケモンとつるんでカイザーの作戦に協力して
いました

まあイービルリングで操られていたわけですが

ライラモン：哀しき再会（前書き）

さて、前回に引き続き総力戦です
残りはデルタモンとキュウビモンのみ
果たして拓馬たちはこの戦いを乗り越えることが出来るのでしょうか

ライラモン：哀しき再会

「くるくるれっくうざん
駆駆裂空斬」

レッパモンが回転しながらキュウビモンに突っ込む

「狐炎龍」

が、キュウビモンも回転しながら炎を纏い、竜のごとき軌跡を描きながら突っ込んだ

「メガフレイム」

「ブイブレスアロー」

グレイモンとブイドラモンが炎とビームでデルタモンを攻撃するが「トリプレックスフォース」

デルタモンのブレスで受け止められてしまう

レッパモンとキュウビモンが互いに吹っ飛んだ

「くるくるれっくうざん
駆駆裂空斬」

「狐炎龍」

再び技の構えに入るもドルガモンが割って入る

「パワーメタル」

絶妙なタイミングで放たれた鉄球がレッパモンにあたり加速、炎ごとキュウビモンを吹っ飛ばした

「やった！」

「こっちも片付いたわ」

そう呟く舞の後ろではデルタモンが伸びていた

「やつらは？」

「いつの間にか逃げたみたいだな」

「やはり一筋縄でかなう相手ではないようですね」

「くっそ、もつとつええデジモンはねえのかよ」

ジャネットがそう叫ぶと

「なら君にいいものを上げよう」

そこに第一話で出てきたマントの人物が現れた

「ジーク様」

レインが彼に頭を下げる

「ジャネット、君のD・フォンを貸してくれないか」

一方徒歩で旅を続ける拓馬達

すると花畑のある広い場所に出た

「ここって……」

真琴は見覚えがあるらしく周りを見渡す

「真琴、ここに来たことあるのか？」

「やっぱりそうだ！ここライラモンにあった花畑だよ！懐かしい！

ライラモン元気かな」

かつて真琴がこの世界で仲良くなったライラモン

そのライラモンと出会った思い出の場所だ

「いたいた、まずは小手調べ」

木陰から見ていたジャネットがD・フォンを彼らに向ける

「ウッドモンリアライズ」

木みたいな体をしたデジモンが4体飛び出した

ウッドモン

枯れた大木のような姿をしたデジモン

必殺技はブランチドレイン

ドルガモン達に撃退されそこら中に4体のウッドモンが転がっていた
「なんだったんだこいつら」

あまりにあっけなかつたので気絶したウッドモンを踏みつけながら

グレイモンがつぶやく

「いやー！やっぱ強いなあんたら」

拍手しながら木陰からジャネットが現れた

「こいつらけしかけたのはお前か」

「確か名前はジャネット」

拓馬と卓が身構える

「悪いけど今日は勝たせてもらうよ、ライラモンリアライズ」

そういつてジャネットのD・フォンから妖精のようなデジモンが現れた

目が赤く光つてることから操られていることは間違いない

しかも、そのデジモンは……

「ライラモン！」

なんとかつてデジタルワールドで真琴と仲良くなったライラモンだった

ライラモン

人に愛されるライラックの花の姿をした完全体の妖精型デジモン
必殺技はマーブルショット

「完全体……」

「とにかく応戦するんだ」

「待て！グレイモン！」

ドルガモンが止めるのも遅くグレイモンはライラモンに突っ込んで
いった

「ホーンインパルス」

「ビューティスラップ」

ライラモンに近づく前にグレイモンはライラモンが放った衝撃波で
倒されアグモンに戻ってしまう

「アグモン」

「レッパモン！ライラモンを助けて！」

「わかった」

そういつてレッパモンが真琴の指示で飛んでいくも

「ビューティスラップ」

攻撃を仕掛ける前にライラモンの衝撃波でクダモンに戻ってしまう

「クダモン！」

急いで真琴がクダモンに駆け寄る

「やはり完全体……あのデジモン強い！」

クダモンがつぶやく

一方でブイドラモンとドルガモンがライラモンに向かっていくが

「マープルシヨット」

ライラモンの砲撃で思うように近づけない

「よっしゃ！そのままとどめだ」

ジャネットの声とともにライラモンの両手が輝いた

パロットモン：力の再来（前書き）

はてさて大ピンチ

完全体のライラモンに追い詰められてしまった拓馬達
果たしてこの危機を脱することが出来るのでしょうか

パロットモン：力の再来

両手が輝きとどめの態勢に入るライラモン

「まずい、今攻撃を受けたら全滅だ」

「いいじゃないじゃない完全体！」

ところが突然ジャネットのD・フォンが煙を上げたと思うとライラモンの動きが止まった

「っち、容量がでかすぎたか、D・フォンが悲鳴をあげがった」

悪態についてライラモンをしまっジャネット

「待ちなさい！」

しかし時すでに遅くジャネットは何処かへ行ってしまった

「ライラモン……………」

「あれ？ここは……………」

「あ、目を覚ましたな」

どうやらウッドモン達の意識が戻ったようだ

「ちょうどいいや、なあウッドモン、この辺にどっか休めるところ無いか？」

「あ、それなら……………」

「くっそ、もうちょっとだったのに」

D・フォンを修理しながら悪態をつくジャネット

「どうやら完全体クラスのデジモンを役役するにはD・フォンから他のデジモンを取り出す必要があるみたいですね」

そいつって自分のD・フォンを見るレイン

「結構デジモン入れてたからなあ、仕方ない、置いてくるか」

「あ、でも彼らへの追撃はまたにした方がいいですよ、もうアイリスさまが向かってますから」

「っち、あの小娘」

海辺の岬にある崖の上に一件の家が建っていた
そのベッドにアグモンとクダモンが寝かされており、舞と真琴が
看病していた

「すまない、我々の力が足りないばかりに」

「今度こそあいつに勝ってあのデジモンを助け出してやる」

「だが、それにはさらなる力が必要だ」

アグモンとクダモンの言葉に卓が返した

「成熟期と完全体の差が予想以上に大きい、昔アスタモンと戦った
時はすぐ完全体に進化できたが、今回ばかりは……」

「それでも！」

突然真琴が大きな声をあげてびっくりするみんな

「やるしかないでしょ」

だがその顔は決して暗い表情ではなかった

「思ったより沈んでないんだな、真琴」

「あれ心のうちは絶対沈んでるって、昔ライラモンに笑顔を忘れな
いでほしいって言われたの覚えてるから無理してんだよきつと」

「拓馬にクダモン！聞こえているよ！」

そんな中突然外から爆音が響いた

「なに？」

「舞達はここにいるんだ、行くぞドルモン」

拓馬と卓、そしてドルモンとブイモンが外に駆けつけると

「ひい」

緑色の巨鳥に乗ったアイリスがウッドモン達を襲っているところだ
った

「なんだ、お前らまだいたのか」

「そこは俺らの家だ！」

あ、ウッドモンの家だったんだ

「そんなことより、あのデジモンは」

パロットモン

鋭い爪と強力な電撃を武器とする完全体の巨鳥型デジモン
必殺技はミヨルニルサンダー

「今度は逃さない」

「おまえたちに負けるわけにはいかないんだ…………たとえ完全体、いや、究極体が相手でも！諦めない！」

拓馬の叫びと共になんとD・フォンが強く輝いた

「まさか…………ドルモン！」

D・フォンに紋章が映りその紋章が輝いた

「ドルモン進化」

ドルモンの体が大きくなり、赤く染まった

「ドルグレモン」

ドルグレモン

最後の敵の異名を持つ完全体の超大型獣竜型デジモン
必殺技はメタルメテオ

「完全体に進化した」

「だからなんだというの」

パロットモンの足から電撃が放たれた

「行け！ドルグレモン」

が、ドルグレモンは飛翔してその攻撃をかわす

「ブラッディータワー！」

地面から赤い光の塔を出現させる

すると翼をかすめパロットモンがバランスを崩した

「おりゃあ」

すかさず体当たりをかますドルグレモン

崖のそばまでパロットモンを吹っ飛ばした

「とどめだ！ドルグレモン」

「メタルメテオ！」

降り注いだ鉄球がパロットモンに襲いかかり、崖の淵へとパロットモンが落ちた

「くっ」

振り落とされたアイリスが立ち上がると足元の岩が崩れた、パロットモンが落ちた衝撃で割れたのだ

「しまっ」

が、拓馬がその腕をつかんだ

「……………」

「手を離すな！今」

「敵の助けなんかいらない」

そういつてアイリスは自ら拓馬の手を振り払い、崖下の海へと姿を消した

パロットモン：力の再来（後書き）

はい、前回のあとがきは度忘れしてました

後、執筆、今まで無計画だったんですが

無計画すぎるのもあれなんで話数リスト作りました

前回登場のライラモンは前作でも重要なキャラクターでしたが……

そして今回はデジモンアドベンチャーで重要キャラとなったパロッ

トモンが登場

あ、ホーリーリング持つてるパロットモンが何で操られるねん、っ

て突っ込みはなしの方向で、イービルリングじゃないんだし

ナイトモン：コンビネーションアタック（前書き）

ついに完全体、ドルグレモンへの進化を遂げた拓馬
果たして残りのメンバーの完全体への進化はいつなのか
それでは続きをどうぞ

ナイトモン：コンピネーションアタック

「どうだった！」

「だめだ、どこにも見当たらない」

前回の最後で海に落ちたアイリスを探して拓馬たちは海岸線を歩いていた

が、どこにも手がかりはなかった

「……………」

拓馬の脳裏にアイリスの最後の姿が浮かぶ

「敵の助けなんていない」

鋭い目でそういいながらアイリスは自ら彼の手を振り払ったのだ
海に消えた彼女の姿が今でもはつきり思い出せた

「そんな！アイリスさまが……………」

「ああ、やつらに負けて海に落ちた、消息および生死は不明だ」

ビリーからの報告を受け今にも倒れそうなくらいふるえているレイン

「そんなバカな…………… アイリスさまが…………… そんな」

「動揺している暇があったら探しに行けばいいんじゃないか？」

ビリーの指摘を受けいったん落ち着くレイン

「それもそうだな」

「だったらデジモンくらい入れて行け、ボスが完全体のデジモンを
用意してくれている」

「そうか、それでやつらのところには？」

「アレックスが向かってるよ」

しばらくアイリスを探していた拓馬たちだったが、立ち止まるわけ
にもいかず今は森の中を歩いていた

「……………」

「いつまでも悔やんでいたって仕方ない、今はこの世界を救うこと

だけを考えよう」

「はたしてできますかな」

そんな彼らのもとに草陰からアレックスが現れた

「あなたたちはここでわたしがたおします、ナイトモンリアライズ」
そういつてアレックスのD・フォンから騎士のようなデジモンが現れた

ナイトモン

重量級のクロンデジゾイド製の甲冑に身を包んだ巨体な戦士型デジモン

必殺技はベルセルクソード

「行くぞドルモン！」

そういつて拓馬がD・フォンを構える

「私たちも」

「待ってくれ」

参戦しようとした舞達を卓が止めた

「下手に参戦してこの前のように負傷者が出ないとも限らない、人数はできるだけ少ない方がいい」

そういつて卓がD・フォンを構えた

「メタルメテオ」

ドルグレモンが鉄球でナイトモンを攻撃するも固い甲冑と盾に阻まれまるで効いていない

「マグナムパンチ」

ブイドラモンが正面から突っ込むもこれも盾に阻まれる

「そろそろ反撃です！ナイトモン」

アレックスの合図とともにナイトモンが剣を振りおろそうとする

「負けるな！ブイドラモン！ドルグレモンだけに頼らず！僕たちも強くなるんだ！仲間を！みんなを助けるための強さを！ブイドラモ

ン！」

卓の叫びと共にD・フォンが輝いた

D・フォンに紋章が映りその紋章が輝いた

「ブイドラモン進化」

ブイドラモンに大きな翼がはえ体も大きくなった

「エアロブイドラモン」

エアロブイドラモン

ブイドラモンが規則的な進化をした大型デジモン
必殺技はVウイングブレード

「拓馬！二面攻撃で挟み込もう」

「おっけー」

ドルグレモンとエアロブイドラモンが両サイド空中からナイトモン
に突っ込むが

「刀があることを忘れていますよ」

ナイトモンは右に剣、左に盾を構え両者を迎え撃つ態勢に入るが

「Vウイングブレード」

エアロブイドラモンが口から放ったV字型の炎で剣を弾き飛ばされる
「くっ」

左から突っ込んできたドルグレモンを盾で受け止めるも、背後がが
ら空きになってしまうナイトモン

「今だ！エアロブイドラモン！」

「マグナムクラッシュ」

背中に強烈な拳を浴びせナイトモンを吹っ飛ばした

「おのれ、次あった時はこうはいきませんよ」

そういつて逃亡するアレックスだった

メタルティラノモン：因縁の戦い（前書き）

というわけでドルグレモンに続きエアロブイドラモンが参戦
果たして次はだれの番なのでしょう

メタルティラノモン：因縁の戦い

現在拓馬たちは薄暗い洞窟の中を進んでいた

「一体どこまで続いているんだ？この洞窟」

「もう少ししたら広いところに出る、そしたら少し休憩しよう」

そう呟きながら岩の隙間を通る拓馬達

「っていうかこの洞窟まともな道はないのかよ」

「メタルキャノン」

ドルモンが岩を割ってようやく広いところに出たのはよかったが

「待ってたぜ、今度は俺が相手だ」

「ビリー！それに！後ろにいるのって」

ビリーが連れていたのは拓馬たちもよく知るデジモンだ

黒とも白ともとれる体をもった恐竜型デジモン

メタルティラノモン

強化された体はどんな攻撃をも跳ね返しアゴの攻撃力は硬い武装も簡単に砕く

必殺技はヌークリアレーザー

「以前、アスタモンの屋敷で倒したことがあるが、エンジニアモンが居ないで勝てるのか」

「とにかく今は戦うしかない、あのときと違って気絶させればいいんだ」

が、それも問題がある、なぜならメタルティラノモンは固い装甲を持っているからだ

「プロットモンが居れば……………」

悔しそうに拳を握る舞

「Vウイングブレード」

「ブラッティータワー」

エアロブイドラモンとドルグレモンが攻撃するもメタルティラノモンはびくともしない

「くっそ、パワーが足りない」

「昔エンジェウーモンがやったみたく一か所を狙い打ちできればいいんだが……」

あいにくドルグレモンやエアロブイドラモンにはそんな器用な技ないドルグレモンの技は一か所を狙うのには弾数が多すぎる、エアロブイドラモンは威力があるため狙いが定まらない

「兄さん……」

「舞！僕たちも行こう！」

「でも……私……」

「プロットモンはいないけど、代わりに僕が居るじゃないか！舞には僕がついてるんだ」

「アゲモン……わかった」

「ヌークリアレーザー」

メタルティラノモンのレーザーがドルグレモンとエアロブイドラモンに襲いかかる

「ホーインパルス」

が、横からグレイモンが割って入った

「私には……アゲモンが、頼もしい仲間がついてるんだ！」
そう叫ぶ舞のD・フォンが強く輝いた

D・フォンに紋章が映りその紋章が輝いた

「グレイモン進化」

グレイモンの体が装甲に覆われ翼がはえた

「メタルグレイモン」

メタルグレイモン

戦いのために己の体を武器と防具に変えたサイボーグ型の完全体デジモン

必殺技はギガデストロイヤー

「いけー！メタルグレイモン」

「トライデントアーム！」

メタルグレイモンが機械化された右腕をメタルティラノモンに振りおろす

するとメタルティラノモンが悲鳴を上げた

「いいぞ！効果があるみたいだ」

更にメタルグレイモンの胸のハッチが開いた

「ギガデストロイヤー」

そのハッチからミサイルが放たれメタルティラノモンに直撃
壁にたたきつけられたメタルティラノモンは完全に伸びていた

「やった！」

「けど、少しやりすぎたみたいだね」

「へ？」

卓の一言で全員周りを見渡す

いつの間にかビリーが居ない、既に逃げ出しているようだが

「派手にやりすぎた、このままじゃ崩れるぞ」

「逃げろおおお！」

「やっぱりあたしがやるしかないみたいだね」

イスに座りながら不敵に笑うジャネット

「んじゃ、そういうわけだから出かけてくるわ」

そういつてジャネットは立ち去った、入れ違いにビリーが戻ってくる

「お？次はあいつの番か」

「そのようだな」

机に伏せながらつぶやくアレックス

前回負けたのがショックだったのだろうか？

「そういえばレインのやつから連絡は？」

「いや、まだだ、搜索に出てからまだ一度も連絡をよこさない」

「ふう、危なかった」

メタルグレイモンの技で無理やり洞窟に道をつくってなんとか脱出した拓馬達

その姿を木陰からジャネットがのぞいていた

メタルティラノモン：因縁の戦い（後書き）

正直に言います

最近全然執筆が進みません

話数リストを作成しめどは立ったものの内容に詰まり

本日ようやく筆をとった所

パソコンがおっこちて消滅（直接書いて予約で書きためている）
鬱になるかと思いました

まあこんなこと前作でもしよっちゅうあつたんで慣れっこですが
そうそう、今回登場したメタルティラノモン

前作にも登場したキャラクターとなっております

僕自身はというと、ぶっっちゃけこの前クロスウォーズに出たのが初
登場と思ってました（実際はティマーズ）

実際はメタルグレイモンの後継機という設定ですが今作ではメタル
グレイモンに軍配が上がりました

ちなみにこの作品のメタルグレイモンはオレンジとなっております

（太一と同じやつです）

チリリンモン：待ち焦がれた時（前書き）

さて、前回舞のアグモンがメタルグレイモンへと進化を遂げたわけですが

残りは真琴とクダモンです

果たして彼女たちは新たな力を手にすることが出来るのか

チイリンモン：待ち焦がれた時

洞窟からかうじて脱出した拓馬たちは近くにあった小さな岩に腰かけていた

「危なかったあ」

「ごめんなさい、やりすぎちゃった」

くたくたになった拓馬たちをよそに苦笑いする舞意外と体力あるみたいだ

「ねえ」

「私も馬鹿じゃないからねえ、わざわざ完全体三体相手にせず一人ずつ倒せばいいのさ」

物陰から彼らの様子をうかがうジャネット

「ん？なんか一人離れてくな」

真琴が一人離れていくのを見てあとを追いかけるジャネット

しばらくして草原で立ち止まる真琴

「ずいぶん広いところに出たな」

物陰から彼女の様子をうかがっていたジャネットだったが

「出てきなさい、そこに隠れているのはわかってるわ」

岩場で待機していた拓馬たちだったが突然戦闘の音が聞こえた

「始まったみたいだな」

「ああ、若槻先輩は自分の手で、ライラモンを助け出したいという強い思いを持ってる」

「ならたぶん、この戦いで」

レップモンがライラモンの弾丸をかわしながら突っ込んでいた
「少しは腕を上げたみてえだな」

ライラモンがレッパモンにむかって衝撃波を放つもかわされる
「っち、結構はええな」

「その調子よ！レッパモン」

更に攻撃をよけながらレッパモンはカマイタチで少しづつだがダメージを与えていた

「くそ、思ったよかやるな、こうなったら動きを止めるまでだ」

ライラモンが両手から花粉を放つが

「今よレッパモン」

「くるくるわっくわん
駆駆裂空斬」

回転してライラモンの花粉を吹き飛ばすレッパモン

これによりライラモンの動きが止まった

「甘いんだよ！」

が、ライラモンの両手の剣で攻撃は受け止められてしまった

「花のデジモンに花粉が効いてたまるか！」

そのままレッパモンは吹っ飛ばされてしまう

「残念だったな」

「ま、まだだ」

ボロボロの状態のレッパモンだったがまだ立ち上がった

「ライラモンを助けるまで！絶対にあきらめない」

二人の思いが重なり、D・フォンが強く輝いた

そしてその光は拓馬たちにも見えていた

「ほらやっぱり」

「がんばってくださいね、若槻先輩」

「レッパモン進化」

レッパモンの体が緑色に染まり、伝説の麒麟きりんに近い姿へと変化した

「チイリンモン」

チイリンモン

雷鳴を纏いながら雲海を駆け抜ける完全体の聖獣型デジモン
必殺技は疾風天翔剣しつぷうてんしょうけん

「進化したからなんだってんだ！」

ライラモンが剣を構えながら突っ込んでくるが、チイリンモンの姿が突然消えた

「ど、どこ行きやがった」

「迅速の心得しんそくしんじゆん」

姿が見えないままライラモンに攻撃を加えるチイリンモン

「くっそ！あたしが負けるってのか！冗談じゃねえええ！」

ジャネットが叫ぶ傍ら、チイリンモンは飛び上がって角を光らせていた

「疾風天翔剣しつぷうてんしょうけん」

つのに雷鳴が走りそのままライラモンに向かって突っ込むチイリンモン

のんびり休憩しながら真琴の帰りを待っていた拓馬たちだが突然大きな音がしたので驚いてコケてしまう

「な、なんだいまのおと！？」

更に突然真琴とライラモンを背中に乗せてチイリンモンが現れた

「のわぁ！……………って真琴？」

「勝ったんですね」

「ちょっとやりすぎちゃったけどね」

でっかいクレーターの真ん中でジャネットがうつぶせのまま倒れていた

「畜生、あの女覚えてろ……………」

「とにかく、ライラモンには治療が必要だ、もっともまだ目を覚ましたわけではないが」

「メタルティラノモンも治療してあげないとね」

そういつて後ろの方で気を失ってるメタルティラノモンを指差す舞
さっきはいなかったはずだが

「どうしたの？あれさっきのメタルティラノモンでしょ」

「自力で崩れた洞窟から這い上がってきた」

「お、ちようどいい、この先に村があるみたいだ」
そういつてマップを見せる卓

その村で思いもしない出会いがあることを
今の彼らには知る由もなかった

ガブモン：思わぬ再会（前書き）

前回完全体がついにそろい踏み

果たして今後どんな闘いが待ち受けているのでしょうか

ガブモン：思わぬ再会

チイリンモンの背中に気絶したライラモンを乗せ、メタルティラノモンはエアロブイドラモンが運んでいた

「もうすぐ村につくはずだ」

卓がD・フォンのマップを開きながらつぶやく、しばらくすると森が開け、村のような場所にたどり着いた
海辺の村のようで近くには砂浜も見える

「あれ？皆さんどうしたんですか」

急に横から声がしたので拓馬たちが振り返ると

「こんなところでまた会えるなんて」

なんとそこにはダルクモンが居た

「実は、傷ついたデジモン達を治療したくて、ダルクモンこそどうしてここに」

「ちょうどよかったみたいですね、私はこの村にいるガルダモンを訪ねるところだったんです」

「そういうことなら、お二人のことは我々に任せてください」

鳥人とインディアンが混じったかのようなデジモンが笑顔で答える
そばではライラモンとはまた違う妖精のようなデジモンが手当てをしている

ガルダモン

大空を自在に舞うことのできる翼と巨大な鉤爪を持つ完全体の鳥人型デジモン

必殺技はシャドーウイング

リリモン

美しく咲いた花弁から生まれた完全体の妖精型デジモン
必殺技はフラウカノン

「せっかくだからこの村で一休みされてはどうでしょう？明日にはあちらのお二人も元気なっているでしょうし、ガブモン、案内して差し上げなさい、あなたのお氣に入りの場所でいいでしょう」
そういつてガルダモンは後ろにいた小さなデジモンに声をかける

ガブモン

憶病で恥ずかしがり屋の成長期のデジモン
必殺技はプチファイアー

「ここだよ」

そういつて一つの小屋に案内された拓馬達

「ここ、しかしなぜ君のお氣に入りなんだ？」

「入ればわかるよ、ねえ、ちょっといいかな」

そういつてドアをノックするガブモン

「ん？中に誰がいるのか」

「うん、とってもいい人、入るよ！」

そういつてガブモンが中に入ると奥に誰か寝ているようだった

「具合はどう？」

「具合って、どこが悪いのか」

ガブモンについて行きながら卓が聞く

「うん、この村に来た時は酷いけがだったんだ」

そう話しているうちに目的の場所についた様子

カーテンを閉めていたのでわからなかったが一体だれが

「ガブモン、誰か一緒にいるの？」

「うん、お客さん、ここに泊めていいかな？」

「（あれ？今の声何処かで……）」

そう拓馬が考え込んでいると相手が布団から起き上がってこっちの

顔を見に来たようだ

が、カーテンを開けた先にいたのは

「え！」

「げ！」

「うそ！？」

「……………」

包帯だらけでタオルを巻いていたが、拓馬にはそれが誰だかわかった

「……（アイリス……………）」

そう、なんと海に落ちて行方不明になっていたアイリスだったのだ

「……………」

アイリスは彼らの顔を見るとたんにカーテンを閉めようとしたが

「待て待て待て」

拓馬によって阻止された

「どういうことなんだい？なんで君が」

「……………ガブモン、少し外で待つててくれない？」

なぜかガブモンを外に出させるアイリス

彼に聞かれたくないことでもあるのだろうか

ガブモンが渋々小屋の外に出て待っているころ

拓馬たちは彼女の寝かされている布団の周りに集まった

「さあ、聞かせてもらおうか、なぜ君がこんなところで治療を受けているのか」

「その前に横にならせてくれない？まだ傷が少し痛むのよ」

「構わないが、少しでも不審なそぶりを見せれば」

「その心配はないわ、私はもう、戦えない」

そういつてアイリスは自分の黒いD・フォンを取り出すが

「これは……………」

そのD・フォンは所々割れていてとても使えそうには見えなかった
「わかるでしょう、私はもう戦えない」

「ようやく見つけた」

崖の上から砂漠の旅人みたいな恰好でレインが村を見下ろしていた

メガシードラモン：驚愕の結末（前書き）

前回傷ついたアイリスと再会した拓馬達

果たしてこの先、どんな展開が待ち受けているのか

メガシードラモン：驚愕の結末

「私はもう、戦えない」

そういつて横になりながら話し始めるアイリス

ドルグレモンに敗れ、気を失い海の上を漂っていたアイリス
そんな彼女の横に船がついた

「まだ生きてるぞ」

「救急箱持つてこい」

「早く村へ戻るんだ」

こうして船に引き揚げられたアイリスはそのまま村へと運ばれ治療を受けた

搬送されて数日後、アイリスは小屋の中で目を覚ました

「ここは……」

しばらく天井を眺めてたアイリスはD・フォンを取り出すが

「壊れている……」

海水に浸かったためだろう、画面は割れ、とても使えそうにない
まあ発火しなかったただけかもしれない

「……………！誰！」

外から気配を感じたので飛び起きて外を見るアイリス

「ご、ごめん」

これがガブモンとの出会いだった

「ガブモンは人間であるに興味を持っていた、そんなガブモンと触れあううちに私は、デジモンが心を持った生き物だと初めて気づいた、もう私にデジモンを傷つけることはできない」

「そうか、君はデジモン達を」

「ええ、ただのデータだと思っていたわ、最初はね、でも……………」
そこまで話すと突然外から爆音が聞こえた

「さあいえ、アイリスさまはどこだ」

「知らないよ、そんな人」

ガブモンが巨大な蛇のようなデジモンにとらえられていた、レインが乗っている

メガシードラモン

追尾型魚雷のようにしつこく敵を追い回し確実に仕留める完全体のデジモン

必殺技はサンダージャベリン

「名乗ってなかったの？」

「そんな必要がある？」

そっけないアイリスの一言にあきれる拓馬達

「とにかくガブモンを助けないと」

「この近くにいるはずだ！いえ！早く」

「だから僕は本当に……………」

次の瞬間苦しむガブモンが一瞬にしてメガシードラモンのしっぽから居なくなつた

「！？」

「御苦労さまチイリンモン」

「ガブモン、お前は下がっている」

「う、うん」

そういつてガブモンは小屋の方に戻るが、この時思わぬ出来事が

「今のうちに逃げよう」

なんとガブモンがアイリスの手を取り外に逃がそうとした

チリンモン、エアロブイドラモン、ドルグレモンがメガシードラモンに応戦していた

「くっ、完全体三体相手はきついか」

が、この時レインは見つけてしまった

ガブモンが小屋の裏口がアイリスを連れ出そうとする姿を

「貴様！その人を放せー！」

怒り狂うレインに同調するかのようにメガシードラモンが強大な電撃を放つ

「しまった！」

が、なんとアイリスがガブモンを庇って電撃を受けた

そのまま煙に包まれ、煙が晴れたあとに見えたのは

「アイリス！」

全身から煙を出し倒れ込んだアイリスの姿だった

「………… アイリス………… 君が？」

その姿を見たガブモンの目からは涙がこぼれた

「うそでしょ、目を覚まして！僕はまだ！君の口から名前を聞いてない！もつと君と、話がしたいんだ」

そう叫ぶガブモンの目からこぼれおちた涙が、彼女が左手に握っていた壊れたD・フォンに落ちた

するとなんと、D・フォンが強い輝きを放ったのだ

ワールルモン：決意（前書き）

前回突如として輝いたアイリスのD・フォン
果たしてこれは何を意味するのでしょうか

ワーガルルモン：決意

アイリスが持っていたD・フォンが輝き
その輝きが彼女たちを包んだ
するとどうだろう

アイリスの傷が光に触れ癒えていく
「ん……………」

そして最終的には気を失っていたアイリスが目を覚ました
D・フォンははまだ輝きを放ち
黒から白へと色が変わっていった

「これは」
そしてガブモンの体も輝いていた

「まさか」
拓馬たちにはもはやなじみ深い光だったが
それでも驚いた

「アイリスが……………ガブモンのパートナーに？」

「ガブモンが……………」

「聞かせてよ、僕のパートナーの名前を、君の口から」
光に包まれながら手を伸ばすガブモン

「私の名前は……………アイリス」
そんなガブモンに答え、アイリスも笑顔で手を握った

D・フォンの画面に紋章が映りその紋章が輝いた

「ガブモン進化！」

ガブモンの体が一回り大きくなり、白銀の獣へと姿を変えた
「ガルルモン！」

ガルルモン

極寒に生息している狼のような姿をしている獣型デジモン
必殺技はフォックスファイアー

「進化した……………」

驚き自分のD・フォンを見つめるアイリスだったが

「こ、これは一体?」

全く状況がつかめず困惑するレインを見て立ち上がる

「レイン」

「アイリスさま、ご無事で何よりです、さ、私と共に戻りましょう」

「私はもう戻らない」

レインの言葉を否定してD・フォンを構えるアイリス

「私は、この子とともに、あなたたちと敵対する道を取る」

「な、何を申されるのですか」

「私にもう、デジモンを傷つけることはできないから」

「なぜ……………なぜだあああああ!」

突然怒り狂ったかのようにつつこんでくるレインとメガシードラモンだった

「ガルルモン!」

ガルルモンがいきなり土を巻き上げメガシードラモンの顔面を直撃、
ひるんだすきに距離をとった

「フォックスファイアー」

ガルルモンの口から青い炎が放たれまたもメガシードラモンの顔面
を直撃

が、これもひるむだけでほとんど効果がない
気絶させるまでにはいかないようだ

「にしても苦しそうだな

「傷つけたくないって言ってたような」

「あれ絶対に目、やられてる」

「矛盾してるんじゃないかしら」
「そこ、聞こえてるわよ」

が、やはりパワーではメガシードラモンにかなわず次第に追いつめられるガルルモン

「負けないでガルルモン、あなたと戦って私は、今まで自分が犯した過ちを償いたい！あなたと一緒になら、それが出来るから」

そう叫んだアイリスのD・フォンが再度強く輝いた

「まさか」

「この短い間に」

「完全体への進化も！？」

D・フォンに紋章が映りその紋章が輝いた

「ガルルモン進化」

ガルルモンが2足で立ち上がり、人狼のような姿へと形を変えた

「ワーガルルモン」

ワーガルルモン

狼男のような完全体の獣人型デジモン

必殺技はカイザーネイル

進化するや否やワーガルルモンははまだ悶絶するメガシードラモンに突っ込んでいった

「カイザーネイル」

爪の斬劇が衝撃波となりそのままメガシードラモンをノックアウトした

一方レインはというと、今までにない表情を見せたあと走り去ったのだった

ガルダモン：アイリスの話（前書き）

前回アイリスとガブモンが正式なパートナーに
はたしてこの先どのような形で物語は進んでいくのでしょうか

ガルダモン：アイリスの話

「なら、アイリスは我々を裏切ったと」

「は、まず間違いないかと」

レインがジークに村での出来事を報告していた

「そうか、なら今このときよりあいつは我々の敵だ、だがレインよ、お前にあいつと戦うことができるか」

が、レインはただ黙って鋭い瞳でジークを見るだけだった

「……………つふ、聞くだけ無駄だったようだな」

そうつぶやいてジークは立ち去った

「アイリス様……………いや、アイリス！私はあなたを許さない！」

一方拓馬たちはライラモンの見舞いに来ていた

「そう、それじゃあまた助けてもらったのね」

ライラモンが笑顔で答える

「ええ、それにまた私は、あなたのおかげで強くなれた、ね、クダモン」

そう言つて肩のクダモンをなでる真琴

「そういえば、新しく仲間になったって女の子は？」

「まだ仲間かどうかかわかんないんだけど、アイリスならまだ小屋に」

そのアイリスはというと引き出しの中のを見ている

「彼らと居ると、とても温かい気分になる……………」

そうつぶやいて引き出しの中から何か取り出した

拓馬たちが戻つてくるとアイリスは白いワンピースを着ていた

「え？えつと……………」

「なに？なにか文句あるの？」

拓馬の反応が気に食わなかったのかにらんでくるアイリス

「あ、いや、似合ってるよ」

「似合ってるけど……」

「どうしたの？その服」

舞以外の三人があわてながら聞く

「前に着てたのはボロボロだったから、新しく仕立てたんだよ」

その疑問に答えたのはアイリスの足元にいたガブモンだった

「さてアイリス、君にはまだいくつか聞きたいことがある、僕たちが戦ってる彼らについて」

全員小屋の床に座りながら卓が話を切り出した

「そうね、そのことを話す前に、改めて名乗っておくわ」

そう言って自分の胸に手を当てるアイリス

「私の名はアイリス・ホワイト、そして彼らのボスの名はアーノルド・ホワイト」

「（ん？気のせいかな？どこかで聞いた名前だな？っていうか……）」

「

「あれ！？アイリスと名字一緒じゃん」

「ええ、もともと彼らは父の会社の幹部だから」

「父の会社？…… あー！どこかで聞いたと思ったらアーノルド・ホワイトってホワイト財閥の会長じゃん！」

「え！？あの大財閥！？」

「っっていうかアイリスお嬢様かよ！」

などと混乱してる拓馬たち

舞は冷静だが……

「話を戻して、レインたちはもともと父の会社の幹部なの、アレックス・シルバー、ジャネット・エメラルド、ビリー・ブラウン、彼ら四人は父の会社の幹部」

「じゃあ、レインは？」

「レインの本名はレイン・ブラック、父の秘書で、小さい頃からよ

く私たち兄妹の面倒を見ていたわ」

「兄妹？」

「ええ、兄のジーク・ホワイト、年は私より7つ上で、ちょうどあなたたちと同じくらい」

「アイリスって年いくつなの？」

「今年で9歳よ」

「舞と同じ年、ってことはそのジークってのは真琴と同じ年か」

「今は父に代わってレインたちに指示を出しているわ」

ここで一息ついてガブモンが持ってきたお茶を飲むアイリス

「ことの始まりは、3年ほど前になるわ、会社のとある施設が、デジタルワールドと完全につながってしまったの」

「三年前っていうと、僕らがルーチェモンを倒したところか」

「ちょうどそのころですよ、地殻変動があつたのは」

拓馬たちのいる部屋にガルダモンが入ってきた

「ルーチェモンを倒してしばらくしたあと、地殻の変動がおきましてね、おそらく再構築の影響でしょう」

「その地殻変動で偶然人間界とつながった、ディメンションマウンテン」

ガルダモンの言葉をアイリスが繋いだ

「彼らのアジトは今、そこにある！」

ガルダモン：アイリスの話（後書き）

さて、こんなときですが

最近あとがきサボってるのはマジで話のストックがやばい上に進まないからです

もうすでに今月分までのストックしかなく、今急いで書き上げようとしているところです

しばらくあとがきはお休みして執筆に集中するようになると思います

マタドウルモン：本当の仲間（前書き）

ついに敵の全貌が判明

いよいよ本格的に始動した2nd！

果たして拓馬たちはこの冒険をどのように繰り広げるのか

マタドウルモン：本当の仲間

村を出て、新たに加わったアイリスたちとともに旅を続ける拓馬たちだった

「……………」

「……………」

「……………」

何やら重たい空気が漂っていた

それでもそのはず、そのアイリスが彼らの後ろ5m位を無言のまま歩き続けていた

しばらくして木陰で休憩する拓馬たちだったがアイリスは離れた位置でガブモンと一緒に休んでいた

「どうやら、まだ僕たちとなれあう気はないみたいだね、彼女」

卓の一言に考え込む拓馬たち

「本当にそうなのかな？」

一方そのアイリスはというと、見つけた木の実をガブモンと食べていた

「ねえアイリス、なんであの人たちと一緒にいないの？」

ガブモンがアイリスに聞くとアイリスはうつむいた

「まだちよつと……………戸惑ってるのもある、こんなにやさしくされたのは初めてだから、でも……………」

そう言っつて自分のD・フォンを取り出す

「本当に選ばれる資格があるのか……………まだ少し迷っている」

「つてアイリスは僕と戦って罪を償いたいつて自分で言っつてたじゃん」

「あ、いや、それは……………そうなんだけど、実は……………わからないの」

「？」

「こういうときどんな顔していいか」

「つぶ！何だ、アイリスってば照れてたんだ！かわいい」

「ちよ、ガブモン！」

「心配しないで僕に名前を覚えてくれたあのときみたいに、笑顔でいればいいんだよ」

「それが、自分でもよく覚えてないのよ、あのときどんなかんじだったか、それにね、実は……………」

「わからない？」

「うん、アイリスたちはみんなディメンションマウンテンの歪みを利用した転送装置で直接行き来していたんだ、でもD・フォンが変わってもどることができなくなってる……………」

「どうやっていけばいいのかわからないのか」

「そうなんだ、それが不安だったんだって、アイリスは」

「心配しないでこの世界を回れば時期にたどり着けるさ、だからガブモン、アイリスにも」

「それが、僕も同じことを言っただけど、そしたらアイリス、また照れちゃって……………」

木の陰で恥ずかしそうにこそこそしてるアイリスを指さすガブモン
「おいおい」

困り果てる拓馬たちだった

「どうやら裏切ったというのは本当のようですね」

「は？」

突然声がしたかと思うと上からなんか降ってきた

「わあ？何これ」

「よく見るアグモン！デジモンだ」

クダモンの言うとおりなんかとげとげしたのとアレックスと一緒にいた

「誰？」

「そういえばガブモンはあったことないんだっとな、で、デジモンのほうはマタドウルモンか」

マタドウルモン

とある博物館の民族舞踊データベースから生まれたアンデッド型デジモン

必殺技は蝶絶喇叭蹴ちやうせつらふしゅうしゅう

メタルグレイモンが機械の腕を振り下ろすもマタドウルモンにたやすくかわされ蹴飛ばされる

「くそ、動きが早すぎる」

「大丈夫、ワーガルルモンなら捉えられる」

アイリスの言葉とともにワーガルルモンがマタドウルモンに突っ込むが、突如マタドウルモンの姿が消え戸惑う

「蝶絶喇叭蹴ちやうせつらふしゅうしゅう」

上空からマタドウルモンがワーガルルモンにキックを当てる

さらにそれによって地面が割れてしまった

どうやら地下水脈があつたらしくアレックスを除く全員が落下していく

すかさず各々のデジモンに捕まる拓馬たちだったがワーガルルモンはマタドウルモンにがちり掴まれてアイリスを助けに行けずにいた

「アイリス！」

崖に打ちつけられつつ必死に手を伸ばすワーガルルモンだったがその手は届かない

「（もうダメ！）」

アイリスがそう思った刹那！ドルグレモンに乗った拓馬がアイリスの手をつかんだ

「今度は離さないぜ」

「良かった」

ほっとしたのもつかの間、マタドウルモンの爪がワーガルルモンに襲いかかるうとしていた

「カイザーネイル！」

が、力ずくでマタドウルモンをひきはがすのだった

「今なら当たる！」

「ギガデストロイヤー！」

「Vウイングブレード！」

メタルグレイモンとエアロブイドラモンの攻撃で水脈に落下するマタドウルモンだった

そして再び旅を続ける拓馬たちは、5人並んで歩いているのだった

メタリフェクワガールモン：謎の少女（前書き）

前回少しずつですがうちとけてきたアイリスと拓馬たち
ディメンションマウンテンを目指す拓馬たちの旅はまだまだ続く

メタリフェクワガモン：謎の少女

デイメンションマウンテンを目指し旅を続ける拓馬たち

彼らは今切り立った崖に挟まれた森の中を歩いていた

「それにしても、最近野宿ばかりで、そろそろ疲れてきたわ」

箱入り娘だったらしくサバイバル生活に慣れていないアイリスは少しだれてきた

逆に慣れまくりなのは六年もの間デジタルワールドで暮らしていた舞である

「ん？何だろうこのにおい？」

そう言つてアイリスを乗せたガルルモンが見上げるとどこからか煙が

「まさかあいつらが！」

「落ちつけガルルモン、硫黄の匂いだ」

「あ……、そうか、この辺に温泉街あったんだっけ」

「温泉とは何だ？」

「私もわからない」

「……」

クダモン、アイリス、ブイモン、アグモンは温泉がどういうものかわからないようだ

「行ってみればわかるさ」

「と、きたはいいものの」

「よく考えれば私たち、この世界のお金持っていない」

と、うつむく宮原兄妹

「大丈夫、人間界のお金使えるようになったんだ」

「ガブモン、僕たちそこまでたくさんは持っていないんだ」

「え？でも……」

そう言つて黒いお財布を取り出すガブモン

「アイリスのお財布にはいっぱい入ってるよ」

「あら、なくしたと思ってたけどガブモンが持っていたの？」

「……………」

「ごめんアイリス」

「気にしないで、これで役に立れるなら」

アイリスのおかげで旅館に泊まることのできた拓馬たちは露天風呂に向かっていた

ちなみにアイリスの財布には万札がびっしり入っていたがそれでも一番安い旅館にした

卓いわく「こーいうの漫画の中だけかと思ってた」だそうだ

が、いざ温泉の入口に来てみると

「入口、どう見ても一個だよな」

真琴の言うとおり

温泉の入口は一つ、男女で別れた様子もない

「ああ、デジモンに性別はないからな」

「『え！？』」

「知らなかった……………」

「私知ってた」

ドルモンのカミングアウトに驚かなかったのはデジモン達と唯一知っていた舞だけだった

「まあ、人格的なものはあるんだろうが」

「交代で入ったほうが無難だな」

「それじゃあ、若槻先輩たちは先にどうぞ、デジモン達は僕らが見てますから」

「え？僕たち一緒じゃないの？」

「お前ら人格が男寄りだしな」

温泉に入っ てゆつくりする舞たち

ちなみに脱衣所もなかったので服は近くの岩にかけてある

「へえ、あなたたち人間？」

そんな彼女たちに龍をもした仮面をかぶった少女が話しかけてきた

「そういうあなたは一体……」

「そのうちわかるわ……」

そう言っ て彼女は上がっ て行っ た

どうやら服を着たまま入っ てたよう で龍麟を模した服が見えた

「何だっ たのかしら……」

不思議に思っ 舞たちだっ たが突然レーザーが放たれすぐそこの地面に着弾した

「何!？」

「見つけたよ……」

金色の昆虫型デジモンを連れたジャネットが崖の上に立っ ていて、その目は殺気に満ちていた

メタリフェクワガモン

武装化により、攻撃力を飛躍的にアップさせた完全体のデジモン
必殺技はホーミングレーザー

「しまっ た!今はガブモン達が一緒じゃないから!」

「この前はよくもやっ てくれたな!あんたらタダじゃおかないよ!」

ジャネットの叫びとともにメタリフェクワガモンが突っ 込んできた

「せめて誰か一人でも、一緒に連れてきていれれば……」

おもわず彼女たちが目をつぶった瞬間、メタリフェクワガモンに向かっ て巨大な剣が投げられ、一撃でノックアウトさせた

「この剣は一体?」

「くそ、おぼえてろ!次は絶対こうはいかない!」

そう言っ てジャネットは去っ て行っ た

また、岩陰では先ほどの少女が彼女たちを見ているのだった

タンクドラモン：深まる謎（前書き）

というわけで前回謎の少女が突如出現
さらなる謎が増えました
はたして物語の行方は

タンクドラモン：深まる謎

「謎の少女か」

温泉街を出て再び森の中を歩く拓馬たち

だが温泉での出来事が気にかかる様子

「なんか、昔の舞みたいだな」

「う……………」

反論できないらしく、口ごもる舞

「（そういえばあいつ何してるんだ？こっち来てからまだあつてないけど）」

暗い森の中

「どうだ？」

謎の影が前回の少女に話しかけていた

「今はまだ発展途上かな？もう少ししたら伸びると思うよ」

「そうか、ところで例の計画についてだが」

「それについても心配無用！もう話つけてあるから！」

「ならいい、後は奴が戻ってくれば……………」

そう言つて影はどこかへ立ち去った

「ようやく見つけたぜ」

拓馬たちが森の中を歩いているとビリーが現れた

「ビリー！」

「ま、早速で悪いけど相手してもらうぜ！タンクドラモン！リアライズ！」

重装甲に身を包んだデジモンがビリーのD・フォンから現れた

タンクドラモン

圧倒的な火力を誇る完全体のマシン型デジモン

必殺技はストライバーキャノン

「あそこか………」

豹のような仮面をつけた男性が山を見ていた
その山の頂上は、時空が乱れているかごとくゆがんでいた……

一方拓馬たちは隠れて様子をうかがっていた

「今回はかなり強敵よ」

そう言ってアイリスがタンクドラモンのデータを見せる

「タンクドラモンは堅い装甲と高火力の銃弾、攻守のバランスが取れた相手よ」

「そう簡単にはいかないか、あの装甲を破れる程のパワーとなるとエアロブイドラモンとメタルグレイモンだが」

「銃弾を突破できるのは、ワールモンとチリンモン、そしてドルグレモン」

三人ともかなり考え込んでいるようだ

「そうだ！この作戦で行きましょう！」

舞が何かひらめいたようだ……

「見つかったか」

「ええ、例の場所は何とか突き止めました」

「よし、奴にその場所を伝えて来るんだ、あとは手はず通りに」

影が少女と男性に指示を出していた

はたして彼らは何者なのか

「迅速の心得」
じゅんそく いんしん

チリンモンがタンクドラモンに攻撃を加える

だが効いた様子はない

「ブラッティタワー！」

さらにドルグレモンの赤き塔が足元から出現するもすぐ碎けてしまう

反撃しようと顔についた砲身にエネルギーをためるタンクドラモンだが

「今よ！ワーガルモン！」

「チイリンモン！後ろから攻撃よ」

「カイザーネイル！」

疾風天翔剣しつぷうてんしょうけん

二体の高速デジモンが背中を攻撃してタンクドラモンを転倒させる
するとどうだろう、砲身のエネルギーがタンクドラモンを打ち上げ
たではないか

ちなみにワーガルモン達は攻撃後即避難したため被害ゼロだ

「ギガデストロイヤー！」

「Vウイングブレード！」

空中に投げだされたタンクドラモンをメタルグレイモンとエアロプ
イドラモンが狙い撃ちした

「やった！」

ハイタッチする舞と卓

一方アイリスもやりたそうな顔をしている

「アイリス」

そんな彼女に真琴が駆け寄って手をかざした

そして二人もハイタッチ

だんだんアイリスも拓馬たちと打ち解けてきたようだ

「あー、負けちゃった」

アジトに戻り座りこむビリー

「では、次は私が行きます」

殺気を放ちながら鋭い目で出かけるレイン

「…………… 変わっちゃったな、おれたち」

そんなレインを見てただそうつぶやくビリーだった

トリケラモン：憤怒（前書き）

前回強敵のタンクドラモンを撃破した拓馬たち
一方で謎の少女たちも確実に動き始めてる様子
はたしてこの先どうなってしまうのか

トリケラモン：憤怒

いきなりですが山の中で戦闘が始まっていた

「レイン……………」

今回レインは三つの角が特徴の恐竜型デジモンを連れていた

トリケラモン

高い突進能力を持つ完全体の角竜型デジモン

必殺技はトライホーンアタック

「なんかあいつ、様子が変じゃないか？」

拓馬の言うとおりだ

以前は柔らかい物腰だったレインだが、今回は何やら目つきが鋭くなっている

「まさか私がこちら側に付いたせいで……………」

「心配しないでアイリス、勝って目を覚まさせてやるさ」

そう言ってワーガルモンが突っ込むが

その瞬間レインの目つきが一層鋭くなり、アイリスは寒気を感じた

「ダメ！逃げて！ワーガルモン！」

アイリスが叫んだときはすでに遅く、ワーガルモンに向かってトリケラモンが突っ込んできた

「うわああああああああ」

しかもそのまま地面にたたきつけられ数メートル引きずられた、悲鳴がやんだ後もトリケラモンが攻撃をやめる様子はない

「やめろ！」

ドルモンとエアロブイドラモンが体当たりしてようやく解放されたワーガルモンはすぐガブモンに退化した

「ガブモン！」

すぐアイリスが駆け寄ってガブモンを抱きかかえる

「アイリス、ガブモンは？」

そのまま拓馬たちも駆けつけるが……

「危ない！」

なんとトリケラモンが追撃しようとしてきた

「エアロブイドラモン！そいつを押さえつけるんだ！」

「メタルグレイモンも協力して」

トリケラモンはパワーが高く二体でも抑えるのがやっとだった
しかも長く持ちそうにない

「今のうちに、離れるわよ」

そう言ってチイリンモンの背中からアイリスに手を伸ばす真琴

「あそこですか」

何やら黒い影が彼らが戦闘を行っている場所を眺めていた

「ギガデストロイヤー！」

メタルグレイモンの攻撃が命中し爆発が起こるが、トリケラモンは
平然としていた

「ギガデストロイヤーをまともに食らって平然としてるなんて」

「これならどうだ」

アイリスたちを避難させて戻ってきたチイリンモンがトリケラモン
の背中を狙うが

「疾風天翔剣」
しつぷつてんしょうけん

しかしながら直撃したその攻撃もトリケラモンにダメージを与えた
様子はない

「アイリス、僕たちも……もう、大丈夫だから……」

「ダメ、レインはきつと、あなたが私を奪ったと思っているのよ、
それにそんな状態で戦わせるわけにはいかない」

そんな中次第にトリケラモンに苦しめられる拓馬たち

「くそ！ブラッティー……………」

「どきなさい」

が、突然飛んできた弾丸がすべてトリケラモンに命中、そのまま気絶させてしまった

「馬鹿な！トリケラモンの堅い皮膚が……………」

「まったく、ようやく見つけたと思ったら邪魔ものですか」

物陰から誰かが現れる、どうやらトリケラモンを撃った犯人のようだが……………」

「お、おまえは……………」

その人物を見て驚いた表情のドルグレモン

「まったく、面倒ですね」

アスタモン

敵に対する残虐性と味方に対する慈愛を持ち合わせる闇のデジモン
必殺技はヘルファイア

なんと、現れたのはかつての敵、アスタモンだった

アスタモン：宿敵再来（前書き）

前回トリケラモンとの戦いに乱入してきたアスタモン
かつてデジモンGATE storyで戦った強敵です
はたして彼の目的は一体……

アスタモン：宿敵再来

「アスタモン……かつて闇のデジモンの軍勢でそれなりの地位を
気づいてたというデジモンか……」

「それなりとは心外ですね、それにしてもなぜあの戦いの後この世
界に現れたあなたたちがそのことを知っているのか……」

「貴様には関係……」

「うせなさい」

レインに銃口を向けるアスタモン

「私はあなたなんかには用はありません、命が惜しければ……」
「っち」

転送され逃げるレイン

「やれやれ、さてと……」

そう言ってアスタモンは

「次は私の相手をしてもらいましょうか、そのためにわざわざこん
なところまで足を運んだのですからね」

拓馬たちに銃口を向けた

「やつが動き出したか……スタンバイしておけ」

「わかりました、移動すると致しましょう」

そう言って虎男と謎の少女はどこかへ移動を始めた

「ヘルファイヤー！」

「ギガデストロイヤー」

アスタモンの銃弾をメタルグレイモンが相殺するが

「マーヴェリック」

足技で文字通り一蹴されてしまう

「やっぱり強い……」

「三年前は四人で力を合わせてやっと勝てた……でも」

「あの時より……………強い！」

「アイリス、僕たちも」

「ダメ……………」

アイリスに抱かれながら草陰にいたガブモン

そのアイリスの手が……………震えているのがわかった

「うわああ」

メタルグレイモンが弾丸を食らって倒れ、アグモンに退化してしまう

「アグモン！」

「ほう、前とは違うデジモンだ」

「今更かよ！」

「まあ、三大天使デジモンはとらえられてるわけですから、致し方あるまい、それにしても」

そう言っただけアイリスたちのいるほうを見るアスタモン

「どうやら、先ほどのトリケラモンとの戦いで恐怖しているようですね」

震えるアイリスを見て嘲笑うアスタモン

「アイリス……………」

「ダメ、怖い……………」

「……………」

恐怖に震えるアイリスに突然ガブモンが頭突きしてきた

「ガブモン！　いったい何を」

「しっかりして、アイリス、僕が一緒だから、たとえ負けて消えてしまっても、僕とアイリスは……………ずっと一緒だから」

「ガブモン……………ありがとう、私はもう……………迷わない！」

「マーヴェリック」

ドルグレモンとチイリンモンが同時に蹴り飛ばされたころ、彼らの

後ろ、アイリスのいるあたりから光が

「この光は……………」

「まさか……………」

「恐怖を乗り越えたことで覚醒しましたか」

「ガブモン！究極進化！」

アイリスがD・フォンを掲げると二人が強い光に包まれた

「メタルガルルモン！」

そして機械でできた狼のようなデジモンが、その場に立っていた

「究極体に進化した！？」

「メタルガルルモン……………」

メタルガルルモン

全身を生体金属クロンデジゾイドメタルで機械化したサイボーグ型
デジモン

必殺技はコキョートスブレス

「これは……………」

「ガブモンと一つに……………」

究極体への進化が初めてなアイリスたちは最初困惑していたが
「究極体、これは厄介ですね！」

アスタモンが突っ込んでくるのを見るとすぐ戦闘態勢に入った

「マーヴェリック」

が、アスタモンの足は空を切り、その後ろにメタルガルルモンが構
えていた

「コキョートスブレス」

「ぐああああああ」

さらに体当たりしてアスタモンを上空に叩きだして

「いまよ！」

「疾風天翔剣」
しんぷうてんしょうけん

「Vウイングアロー！」

上空からチリンモンとエアロブイドラモンがアスタモンに追撃をかけた

「俺の出番、ほとんどなかったな」

「まあ、そう言わないでよ」

進化がとけた途端腰を抜かしてへたれこんだアイリスが拗ねてる拓馬とドルモンをなだめていると

「やれやれ」

アスタモンが立ち上がった

「うわ！」

「まだやるか」

「これほどの力なら………認めざるを得ないでしょう」

「は？ いったい何を？」

首をかしげるアグモンだったが

「案内してあげますよ、あなた方が目指す、ディメンションマウンテンへ」

ミネルヴァモン：託された思い（前書き）

前回意外な相手から切り開かれた道

なんとアスタモンがディメンションマウンテンへの道を教えてくれるとのこと

はたしてこの先どうなっちゃうのやら

ミネルヴァモン：託された思い

アスタモンの案内で森の中を進む拓馬たち
そんななか

「一ついいか、アスタモン」

ドルモンがそんなアスタモンに言葉をかける

「なぜおまえがここまで俺たちに協力する

「……………私はこう見えて仲間は大事にするタイプなんです」
歩きながら語り始めるアスタモン

「知つてのとおり、あなたたちの活躍で闇と光の争いは終わり、互いの調和が取れた平和な世界となった、そんな世界で暮らすうちにわかったのです、闇も光もない、すべてのデジモンはみな……………大事な私の仲間であると」

「アスタモン……………」

「私の仲間を奪う彼らを許すわけにはいかない、どうかこの世界を頼みます」

「わかった、おまえのその言葉を信じよう」

ドルモン、拓馬、卓、真琴、舞はうなずいたが

「あの……………私はなしについていけないんだけど」

新しく加わったばかりのアイリスは困惑しているのだった

「さ、つきました、ココがディメンションマウンテンです」

ついにたどり着いたその場所は雲の上に届かんばかりの高い山、そして上空に見える歪んだ雲

「できればあの上が確認できるといいんだけど」

そう言つてアイリスが山の頂上のあたりを指さす

「でしたらこのオペラグラスをお使いください」

「用意いいお前」

アスタモンに借りたオペラグラスでアイリスが頂上を見る

ゆがんだ雲の真下に高い建物のようなものが見えた

「間違いない、彼らのアジトよ」

「だが、おまえたちがそこに着くことはかなわない」

アイリスの言葉に突然割り込んだのは……なんとあの虎男

「ここから先に行きたければ私たちを倒すことね」

「あ！あなたはいつかの！それにその剣！」

謎の少女が持っていたのは以前メタリフェクワガーモンを倒した大剣だった

「わが名はマルスモン」

「そして私はミネルヴァモン」

「「デイメンションマウンテンの番人！！」」

マルスモン

豹人の姿をした軍神デジモン

必殺技はコロナサンクションズ

ミネルヴァモン

少女の姿をした神人型デジモン

必殺技はストライクロール

「まさか！究極体のデジモンが2体だと」

驚くアスタモン、どうやらあの二人、彼の口ぶりからすると究極体のようだ

「だったらここは私が行く、みんなは援護して」

5人の中でただ一人究極体に進化できるアイリスが名乗り出る
ここに来るまでにすでにガブモンは回復済みだ

「ガブモン！究極進化」

アイリスがD・フォンを掲げるとD・フォンから強い光が現れ、光が砕けた後には機械でできた狼のようなデジモンが立っていた

「メタルガルルモン」

同時にドルグレモン、エアロブイドラモン、チイリンモン、メタル
グレイモンも戦闘態勢に入る

「さあ、行くわよ」

「我らにその力、示してみよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8981s/>

デジモンGATEstory 2nd

2011年11月17日17時39分発行